

大学一般教育における情報倫理ビデオ教材の留学生への適用

Application of Video Materials on Information Ethics to International Students as General Education in University

布施 泉^{*1}

Izumi FUSE^{*1}

^{*1} 北海道大学情報基盤センター

^{*1} Information Initiative Center, Hokkaido University

Email: ifuse@iic.hokudai.ac.jp

あらまし：情報倫理デジタルビデオ小品集を留学生に向けて利用することについて検討を進めている。その一環で、英語化したビデオ教材2種類（字幕版もしくは吹替え版）を、一般情報教育の授業を英語で受講している北海道大学の留学生に対して視聴させた。2017年度に試行した結果、字幕版の評価が比較的高く、吹替え版はあまり必要とされていないことが示された。本結果に関する考察を報告する。

キーワード：情報倫理、留学生、教材、ビデオ、字幕、吹替え

1. はじめに

情報倫理教育は、情報社会を生きる私たちにとって不可欠の教育である。大学段階においては、個人情報やプライバシー、情報セキュリティ、知的財産権、情報格差など、情報化が社会にもたらす様々な影響を理解し、より善い社会を創出するための検討を、授業の一環として検討することも必要になると考える。人や立場、状況により、一つの事象に対しても、相反し得る価値判断を行う場合は多くあり、学習者は、ほかの多様な背景を持つ学習者の中で、意見交流を行いながら、情報倫理の能力を深化することが望まれる。

大学においては、多様な背景を持つ学習者として留学生を想定することが可能である。ある事柄に対し、日本人学生と留学生とで、同じような価値判断をするのか否か、異なる価値判断をする場合があるとすれば、それはどのような背景からか、等、実際のケースを想定し、対応の同異を明らかにすることは意味があると考え。そのためには、ケース学習として、日本人学習者にも留学生の学習者にも同じ題材を示し、それについて検討してもらうことが必要である。

本稿では、大学生が主人公に自己投影可能な教材として、ビデオ教材（情報倫理デジタルビデオ小品集⁽¹⁾）を活用することを想定し、日本人向けに開発された本教材を、留学生に対して適切に適用するために、どのような教材化が適切であるかを検討することを目的とする。

2. 情報倫理デジタルビデオ小品集の英語化

情報倫理デジタルビデオ小品集は、大学 ICT 推進協議会⁽²⁾が企画・制作し、著者らが継続的に開発してきた教材である。物語と解説に分かれており、物語で何らかの問題が起き、解説でその問題が起きた背景や理由、対処方法などを示す。大学生を想定した役者が主人公であり、物語は大学生の生活を基に

した映像で構成されており、学習者の自己投影がしやすい教材となっている。

2.1 解説フリップの英語化

解説編の映像では、起きた問題の解説を行うため、日本人学生に向けて、図や用語として日本語が表記されている。英語化する場合には、この部分を、英語表記に変換する。図1に一例を示す。

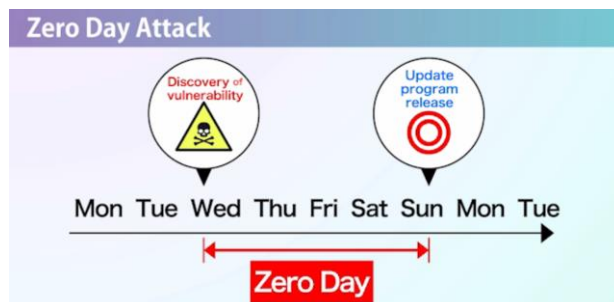


図1 解説フリップの英語化の例

2.2 セリフの英語化

学生同士のやり取りや解説者の解説内容は、日本語で行われている。英語化するためには、字幕をつける場合と吹替えを行う場合が考えられる。費用の観点からは、字幕の方が、吹替えに比して安価である。字幕では、その内容の変更も容易である。一方で、解説が長いなど、字幕の量が多くなる状況が生じ、提示時間が短くなる場合には、字幕の方に不都合が生じる場合があると考え。予算の関係で、吹替えを行ったクリップは、後述する「ランサムウェア」と「電子署名」の2種類に留まる。

3. 一般情報教育における教材の適用

北海道大学では、グローバル人材育成を目的とした留学生向け教育プログラムが2015年度から始まった。「現代日本の社会や文化に関心を持つ留学生を広く世界に求め、十全な英語能力と極めて高い学力

を有する留学生に対して、徹底した日本語教育を実施し、同時に現代日本の社会や文化に関する理解を深めるための教育」を行うとされる⁽³⁾。本学生は入学時には日本語を要さず、情報教育も英語にて行っている。これら 20 名程の留学生に対し、本ビデオ教材の英語化教材を視聴させ、フィードバックを得た。

3.1 結果

2017 年度前期の一般情報教育の授業において、ほぼ毎週、情報倫理ビデオを 1-2 種類視聴させた。このうち殆どは字幕化された英語教材を用いた。後半 2 回のみ用意した吹替えのビデオ教材を視聴させた。

これら英語化教材に対する評価は、第 15 回（最終授業日）に行った。結果を図 2、図 3 に示す。

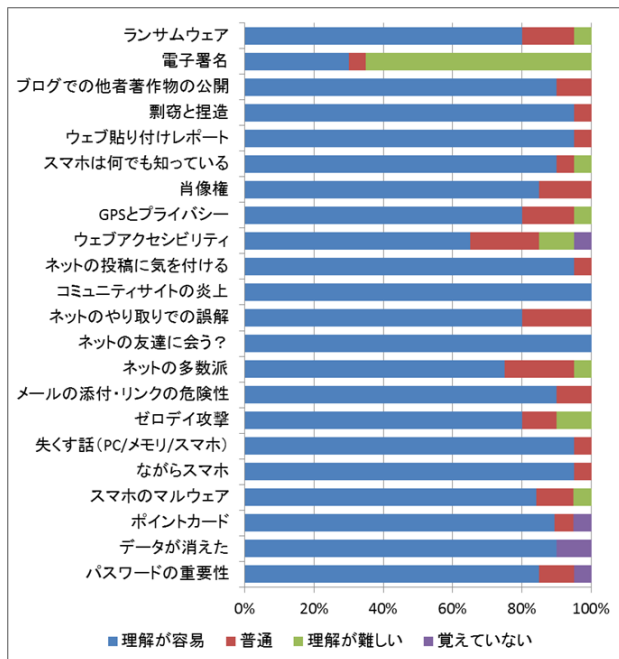


図 2 各クリップにおける理解のしやすさ

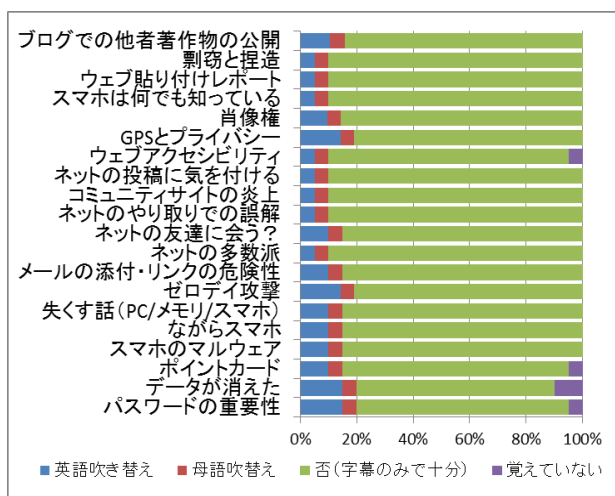


図 3 各クリップにおける吹替えへの要望

図 2 より、電子署名のビデオ以外は、難易度はほぼ同じで、8 割以上の学習者が容易に理解できるレ

ベルであることが分かった。図 3 は、字幕で用意されたビデオクリップに対し、吹替え版が必要か否かを聞いたものであり、殆どの学生は字幕のみで十分と回答した。

4. 考察

3.1 の結果より、留学生はビデオ教材の英語化において、吹替え版はあまり必要としていないことが明らかになった。吹替えのビデオに対する自由意見では、吹替え音声と字幕とのズレや、口の動きと音声とが合っていないことを指摘するものがあった。ビデオそのものに対する評価は高いものの、映像や字幕と、吹替え音声のズレがあるのであれば、字幕のままで十分であると感じた可能性がある。つまり、今回試行した学習者に対しては、音声を吹き替えることなく、日本語音声に英語字幕がある形の英語化教材が望まれていることがわかった。

但し、これは、今回の対象となる学習者が日本文化を学ぶことを目的とした留学生であることが影響している可能性も考えられる。日本語を重点的に学んでいるために、日本語音声を望んでいる可能性がある。今後は、対象となる学生の所属を変えて調査すること、同じクリップの字幕教材と吹替え教材を両方視聴させ、評価させるなどで、結果が変化するか否かを確認したいと考えている。

5. まとめ

本稿では、多様な背景を持つ学習者集団において、情報倫理教育を行う可能性を鑑み、日本人向けに作成された情報倫理教材を英語化し留学生に適用した。学習者は、解説を伴う画面の英語化は必要であるものの、音声は日本語のままで字幕を付せば問題ない旨の評価を得た。学習者の属性の影響については今後更なる調査を行う。

謝辞及び付記

英語教育の実践については、Evans Benjamin 氏の協力を得た。フリップの英語化および字幕化については、大学 ICT 推進協議会の支援を受けて行った。本研究の一部は、科学研究費 16K01101（代表者：岡部成玄）の支援を受けた。

参考文献

- (1) 布施泉, 岡部成玄, 辰己丈夫, 上田浩, 上原哲太郎, 中西通雄, 多川孝央, 村田育也, 和田智仁: “情報倫理デジタルビデオ小品集 6”, 一般社団法人大学 ICT 推進協議会, 京都 (2016)
- (2) 大学 ICT 推進協議会, <https://axies.jp/ja/>
- (3) 北海道大学: “グローバル人材を育成する「現代日本学プログラム」を創設 (お知らせ)”, プレスリリース, https://www.hokudai.ac.jp/news/131025_pr_oia.pdf, (2013), 閲覧日 2018/6/12.